

経済学研究科附属経済研究所 サブ・クラスター研究計画書

平成 27年 3月 4日

経済学研究科附属経済研究所長 様

[申請者]

所属(専攻) 経営学専攻

補職名 教授

氏名 河合 篤 男

平成 27 年度より研究所サブ・クラスター研究を申請したく、研究計画書を提出します。

1. 研究課題名	中部圏の産業集積の革新についての研究
2. 研究期間(5カ年度以内)	平成27年 4月 ~ 平成 30年 3月
3. 共同研究組織 研究代表者(申請者) 共同研究者(所員)、 客員研究員	(氏名・所属クラスター・補職名) 河合篤男・経営学系クラスター・教授 出口将人・経営学系クラスター・准教授 松本正義・経済学研究科研究員 高橋和志・経済学研究科研究員
4. 現在までの準備状況 (研究実績など上記の研究 課題と関連したもの)	これまでに上記メンバーは中部圏の複数の産業集積について調査、研究をおこなってきた。具体的には、愛知県木曾川地域の繊維、岐阜県東濃地域の陶磁器、同じく下呂地域の観光にかかわる集積を対象に、それぞれの歴史と現状、とりわけ現在進行中の革新の取りくみについて、経営学(における産業集積論)のフレームワークにもとづいて主としてインタビュー調査、参加観察やアクション・リサーチなどで収集したデータをもとに、記述、分析するにとどまらず、折にふれ実践的提言をおこなってきた(いる)。これまでに公刊された主たる研究成果は以下のとおり。 高橋・松本(2011)「産業集積の再構築に向けての準備的研究 尾州産地の織物産業を事例に」 <i>オeconomia</i> 、48(1)、67-47。 出口(2011)「陶磁器産地の形成プロセスとその決定要因」 <i>名古屋市立大学経済学会 DP シリーズ#534</i> 、17頁。

5. 研究目的

近年、中国をはじめとする途上国の産業集積との地域間競争によって、これまで長きにわたって日本の地域経済に大きく貢献してきた産業集積は苦境に立たされており、このことが地域の衰退の一因となっている。そこで地域の産業集積の復活が求められているが、賃金などの基礎的な条件において途上国にたいして圧倒的に不利であるため、それには根本的な革新が不可欠である。そこで本研究では、そうした産業集積レベルの革新をいかにして実現するのかという問題について考察する。より具体的には、地域として、これまでの「良いものをより安く、より迅速に」という効率性を重視した構造から、地域の独自性を生かした製品づくりやドメインの転換、そして、それらを継続的に生み出すための構造への転換をいかにして実現するのかという問題について考察する。これをつうじて日本の地域の産業集積の復活のための具体的な手掛かり、方策を引きだし、地域経済の活性化／継続的な発展に貢献しようというのが、本研究の基本的な目的である。

6. 研究計画・研究方法

研究計画

すでに松本、高橋がメンバーとして関与している「木曾川ルネッサンス・プロジェクト」(以下、木曾川プロジェクト)を中心に、中部圏において産業集積の革新に成功したと考えられる、あるいは革新を継続中の事例の調査をおこなう。木曾川プロジェクトにかんしては、2010年からインタビュー調査、参加観察、アクション・リサーチのかたちでデータを収集しているが、これを継続しておこなう。他の事例については、産業集積全体としてドメインの転換をおこなったとみなされる地域を幅広く探索的に調査し、適切な事例についてケースを作成する。いずれの事例においても、研究の性質上、継続的な関与、調査が必要とされるが、さしあたりはプロジェクト開始後2年を目処に調査を一段落させ、3年目に個別事例の整理、発表とそこから帰納的に導きだされる実践的な提言の作成、発表をおこなう予定である。

研究方法

木曾川プロジェクトにかんしては、上記のとおり、これまでの調査を継続する。そのほかの事例にかんしては、公表された統計資料をふくむ文献調査によって適切な研究対象を選びだしたのち、詳細な事例の記述のために当該地域の関係者へのインタビューなどの現地調査をおこなう。

メインとなる現地調査では、公表資料からえられたデータをふまえつつ、経営学における起業家論や産業集積論でえられた知見をもとに、それぞれの地域における革新のコアメンバーを主たる対象に、①革新の背景、②革新のプロセスで直面した問題、③そうした問題の解決方法にかかわるデータを収集する。これをもとに、それぞれの地域の産業集積の革新にかかわる重層的な記述をおこなう。そして、こうした記述をもとに、産業集積の革新のための手がかり、方策を導き出す。